

第三百十八回 青葉会

平成二十四年九月二十七日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉 石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯

山崎亜也 山内天牛

〈投句〉 伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 宮内規雄 南平和夫

渡邊盛雄

〈紙上選句〉 赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明 星田啓子 村田くに子

山崎青史 山本三恵

ゴシックは撰者の天

《選者吟》

嵐去り断捨離初日涼新た

万里子 (紀・弘・く)

(断捨離Ⅱヨガ的新片づけ術)

故郷(こきょう)へと退職記念の秋遍路

全 (紀・一)

(一：「と」は不要?)

残り蚊の刺す速さ吸ふしつこさよ

全 (猛・恭)

夜長読む母校の生徒の長寿祝

全 (隆)

黒猫へ真赤な実降るゴーヤ棚

全 (紀)

《互選句》

九点 ☆横笛の吹口(くち)の紅拭く祭髪

一灯 (万・恭・弘・敏・ゆ・く・亜・天・三)

(☆：「の吹口の」↓「につきし」)

七点 ☆馨女(こぎ)の墓海霧(じり)這ふ野地の行止り

全 (万・恭・敏・ゆ・啓・く・青)

(青：いかにも俳句らしい俳句。「行止り」が哀しい)

六点 ☆荷を少し軽くしてみる防災日

昇 (万・忠・弘・敏・ゆ・正・天)

☆裸灯(はだかび)の牛舎の暗(くら)み昼ちちろ

一灯 (万・清・紀・ゆ・亜・天)

(霧ヶ峰)

五点 ☆夕映えの花野の水に筆洗ふ

全 (万・ゆ・允・啓・亜・三)

☆せめてもと担ふ柘や秋の雨

恵洲 (万・一・啓・く・天)

☆金婚式了へて夕餉の初秋刀魚

盛雄 (万・紀・龍・く・亜)

— ◎日経俳壇10月7日 黒田杏子選

四点 書展二巡心澄みゆく秋彼岸

紀久男 (堅・恭・敏・正)

(正：二でなく三では?)

友の訃報に接して

☆今宵より月に倂映し酌む

ゆたか (万・堅・敏・三)

菓効もありと學びて西瓜買ふ

亜也 (清・猛・允・天)

日傘さし下山の女八甲田

忠彦 (龍・正・青)

(正・青：男は日傘使わぬから女は不要)

黒板の落書き釣瓶落しかな

健介 (紀・允・正)

(正↓上五「廃校の」では?)

新米のお裾分けなり玉子めし

堂哉 (忠・青・三)

枕辺に波音かえす月の宿

ゆたか (堅・清・允)

☆鮎落ちて郡上の瀬尻暮れ残る

一灯 (万・正・啓)

(正↓上五「落鮎や」では?)

☆行水も居間にて介護さるる日々

和夫 (万・紀・忠)

☆朝顔や一色(ひといろ)濃きは西洋種

亜也 (正・啓・青)

(正：「や」でなく「の」にしたらく?)

二点 汗しとどこれも生きてる証にて

そらお (紀・猛)

うとましや蚊遣りの煙我を追ひ
見上ぐれば山に誘ふ秋の空
晩酌に秋刀魚の刺身(さし)や旬の味

そらお (清・猛)
清 (堅・忠)
全 (堅・忠)

(青:「刺身」サシミと素直に読ませ「や」をとればいいのでは?)

三津五郎の「芭蕉通夜舟」

☆ 客湧かせ独り芝居の秋夜かな
電柱の陰に身を寄す残暑かな

紀久男 (弘・敏)
恭延 (万・允)

気は若く鏡は真実敬老の日

忠彦 (堅・猛)

数かぞへ小鴨の無事を野分後

全 (紀・三)

団子焼く香りや秋の深大寺

弘子 (清・天)

苦瓜の苦味句材に苦吟かな

ゆたか (龍・隆)

百日紅何やら宿酔したらしい

正明 (弘・青)

(青:とぼけていて面白い。「何やら」は「どうやら」がいいのでは?)

猫じやらし風を集めてじやれてをり

規雄 (弘・ゆ)

秋祭もらふ好物杏子飴

天牛 (垂・三)

爽やかや無事にもどろし落し物

全 (恭・允)

秋雨に濡れて買ひ物袋提げ

清 (垂)

床に就き一際上がる虫の声

全 (龍)

能楽堂で「鶯娘」

呼吸合はせ舞手後見爽やかに

紀久男 (く)

おでこに土神に感謝の相撲取

全 (恭)

(千穂楽の日馬富士)

秋彼岸法話聴かんと獅子瓦

全 (龍)

(西本願寺)

夕映えに筑波の稜線秋姿

猛 (一)

秋彼岸律儀に涼気届けたり

全 (龍)

坂上る伏目の人や秋暑し

恭延 (猛)

悪夢覚め廁の窓から虫の声

忠彦 (隆)

東京だよおつ母さんに泣く夜長

弘子 (忠)

死刑執行のニュース流るる曼珠沙華

全 (隆)

高下駄のバイオリン弾き秋祭

全 (一)

ニホンカワウソ滅び今年も瀬祭忌

恵洲 (一)

鳴く鳥の影縁にさし秋天へ

ゆたか (紀)

長過ぎる秋刀魚を買って持て余す

正明 (忠)

鰯雲掴みに行かむ観覧車

昇 (啓)

強風を優しく受けて猫じやらし

規雄 (清)

そこはかとミツクスジュースの林檎かな

亜也 (隆)

秋の宵百年の驛甦る

全 (一)

(上五は下五にした方が良いのでは?)

五千匹「目黒のさんま」焼かれけり

天牛 (弘)

無花果食ふアダムとイブは吾の仲間

盛雄 (隆)

● 次回青葉会

十月二十五日(木) 午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲ 当季雑詠各自五句。投句は二句

十一月二十二日(木)

平成二十四年九月句会報

一 今回は先生以下11名出席。投句9名。猛さんの司会（猛さんは読書会幹事を長年されておられます）で順調に進行、御覧のように一灯さんの一人勝でした。

久しぶりに美酒が四本：天牛さんのブルゴーニュ赤ワイン”Chapellet Chambar tin”95年、弘子さんの一升壘・純米「天狗舞」、忠彦さんの青森土産純米吟醸「豊盃倶楽部」（弘前の三浦酒造）と純米「亀吉」（黒石の玉垂酒造）も揃い、先生からの焼芋（皮ごと食べる種子島産）、弘子さんのピーナツ最中と饅頭（成田の米屋）をつまみ乍ら大いに飲み食いし、夏バテの皆さん漸く息を吹き返した感じでした。

当日の話題（一）和夫さんの病状（二）五郎太さん私大の講師に（三）繊維資材OB会（四）来春新開場の歌舞伎座等々。

二 関係者近詠

参詣に程好き人出梅雨晴間

万里子

おしきせ

蓮の葉へ集まる雨の転（まる）ぶ光ゲ

全

御仕着をまもりてけふは憲法の日

無聞齋

梅雨濡れの前垂れ真赤猿田彦

全

蚊遣香母の眼われを素通りす
――『俳句』10月号 伊藤伊那男選（秀逸）

びつしりと樹々に青苔飛鳥山

全

鯨舟のぼらまかれゐる山の湖
――『俳句』10月号 西山睦選（推薦） 選評省略

嬰を抱いて見えぬものから逃げる夏

全

新橋の小ていな酒場衣被

允章

分蜂のホバリング散り竜巻来

全

登校の子ら生き生きと休み明け

全

祝婚へ聖句の詩吟さくらんぼ

全

妻の遺骨食ひしと言ふ人秋暑し

全

ハンカチは大判肉体労働派

全

嗅ぐのみで食はぬ老犬秋暑し

全

ひとことの多きも足らぬも心太

全

赤蜻蛉止まり休めしオールの手

全

和綴ちより生成面（なまなり）の角雲母虫

全

――『大鉄会』9月

全

深々と子役のお辞儀夏芝居

全

自鳴鐘ジャンヌダルクもゐる良夜

青史

女子高生夏の真ん中弾け来る

全

うはべだけ和解せし夜の濁り酒

全

歌丸の怪談聴くや夜涼み

全

一椀の松茸飯を仕上げとし

全

焼茄子の皮剥く妻の気魄かな

全

四万十川のうるかちびちびひとり酒

全

蒸し暑き巢鴨吟行足早に

全

ぼやき癖今は懐かしつくつくし

全

――『萬緑』十月号

全

二巡り番ひて西へ鬼やんま

全

斥候か迷子か机上の蟻一匹

全

宅配嬢水ごくごくと残暑かな

全

――『NHK俳句』10月号 「文芸選評」（ラジオ）

西村和子選

全

悼・勝部実君

全

堂哉

全

――『俳句』8月号

全

悼・四世 雀右衛門

全

――特別作品50句より

全

高橋睦郎

全

――特別作品50句より

全

三 俳誌近刊より小生好みの句抄出してみました。

A 『俳句あるふあ』10/11月号

白菊のしづくつめたし花鋏

全

勇氣こそ地の塩なれや梅真白

中村草田男

かんがらす嘴太々と君臨す

全

水脈の果炎天の墓碑を置きて去る

金子兜太

独楽として闘志生まれし木の実かな

全

あやまちはくりかへします秋の暮

三橋敏雄

――稲畑汀子「ホトトギス」100人100句より

全

――黒田杏子「私が愛する俳句50」より

全

京の夜や鱧の字知りて鱧の味

全

B 『俳句』8月号

全

アラー称ふあれは銀漢これは砂

全

――悼・四世 雀右衛門

全

寒月下しんと紫紺のしなのかな

全

――宇多喜代子「戦後の百俳人」より

全

――宇多喜代子「戦後の百俳人」より

全

――特別作品50句より

全

露の夜は露の世ながらさりながら

全

三姫のことに雪姫春の雪

全

たましひのたとへば秋のほたる哉

全

――特別作品50句より

全

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

全

――特別作品50句より

全

十月十日

紀久男記